

二次元ぶち文庫

退魔浄化師 御紫氷理

みしばこおり

退魔教師 希彩
side story

表紙イラスト：ヨシカ
天戸祐輝

試し読み版

当ファイルは、二次元ぷち文庫 書き下ろし作品となります。

※本作は二次元ドリームノベルズ『退魔教師希彩 羞虐の学園』（キルタイムコミュニケーション刊）とともに読みいただきますと、より楽しみいただけます。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



御柴氷理

退魔浄化師

みしばこおり

退魔教師 希彩
side story

天戸祐輝

表紙／ヨシカ

登場人物紹介

Characters

みしばこおり

御柴氷理

一見、学生生活を満喫する天真爛漫な性格の女子大生だが、その正体は紫羽一族につらなる系譜の退魔浄化師。

かげたけいつき

蜚岳樹生

氷理に対してストーカー的に告白をし続ける、歪んだ恋愛感情を持つ生物学専攻の学生。

道の両側に木々が立ち並ぶキャンパスの道。

雲一つなく日の光が注ぐその道を、数人の男女が楽しげに歩いていた。

会話の内容は大したものではない。

今日の抗議やら今夜の合コン、または恋愛の話を脈絡もなしに切り替えては笑っているだけだ。

「ねえっ、氷理、本当に今日の合コン行かないの？」

「え？ 行かないって言ったらいーかーな〜いつ。今夜用事があるんだって」

「え〜〜〜っ、行こうよ。ごはんタダだよ」

「タダって、ひでえな。合コンは飯喰うところじゃないだろ」

「ご飯食べるどころよ。お持ち帰りは絶対ナシっ」

女子の言葉に男子が突っ込み、笑いが湧きあがる。

特に仲がいい集まりという感じではないが、このグループは氷理と呼ばれた女子が中心になっていた。

女性にしては背が高く、すらりとした彼女は、他の女子と比べても明るく、くっつくの
ない性格をしている。

切れ長で猫のような紫の瞳は不思議な魅力を放ち、綺麗で形のいい高い鼻、そしてその
下にある唇も整っていて魅惑的だ。

しかも顔の輪郭も大人び、体型も出るところは出ているモデル体型というため、この大学に入学してから三年連続でミスコンの女王に輝いている。

そんな彼女が青いジャケットに淡い水色のホルダーネックトップ、そして白のミニスカートのという服装を嫌味なほど着こなし、金色の長髪を揺らしながら歩いているのだ。

目立たないはずがない。

「ねえお願い氷理っ、なんか向こうの幹事が氷理を絶対に呼べっとうるさいのよ〜」
合コンに誘っている女子が押んできた。

なんとなく、最初から合コンのダシに使われている事には気づいているが、そんなに悪い気はしてない。

それだけ自分に興味のある男が多いという目安、自信になるバロメーターのようなものだ。

（いつもなら行っただけだよね〜）

「ごめんっ、ホントに今日はダメなんだっつ、今度埋め合わせするから」

どんな男が自分を呼んでいるのか気になりながらも、両手を軽く合わせてあやまり返す。行ったところでお持ち帰りされる気はないが、合コンで自分と肉体関係を持つという考えが気にいらぬ。

それに、今日はもつと気がかりな事を先ほど見つけてしまったのだ。

「うーん、しょうがないな」。そのかわり、今度はちゃんと付き合つてよ」

「分かつてるって、今度は行くわよ、過激な恰好でね」

「本当ね、向こうにそう言っちゃうから」

「ええ、いいわよ。パンツくらは見られる覚悟で行つてあげる」

パンツくらは。の言葉で、周りにいる男子が反応した。

「御柴のパンツが見られるなら、その合コン俺も参加してやるぜっ」

「俺も俺も！ レズ女のパンツなんて滅多に見られないからな」

「誰がレズよっ、誰がっ！」

鳩尾に軽く拳を叩き込む。

「ぐえっ」

そんなに強くない打撃にもかかわらず、男子は白目を剥きながら膝をついた。

「そんなに強く殴つてないじゃない。それに私はレズじゃなくて、女の子が好きだけ」

「だからそれがレズだつてんだろ。それに、おまえまだ男と付き合つたことない処女……」

「うっさいっ」

「ぐえっ」

再び別の男子に軽く拳を叩き込み陥落させる。

しかし、所詮軽い打撃だ。

二人の男子はすぐさま立ち上がり、何事もなかったように歩きだした。

「でもさ、氷理の付き合った女ってどれだけいるんだ？」

「しらね、確かこのまえ、後輩の女がレズったことがあるって言ってたけどな」

「……………」

男子の言葉に、一緒に歩いてた女子全員が頬を染めて顔を俯かせた。

「そんなこと知ろうとするからあんたたちモテないのよ。そのままじゃ一生童貞ね、DT
人生まっしぐら〜」

「な、だ、誰が童貞だよっ」

「あれ？　なら何人経験したの？」

「うっ」

今度は男子が黙り込む。

ある意味、一人勝ちになった氷理は気分よく歩き、男子の肩をポンポンと叩いて励ました。
(ま、処女じゃなかったら、私が童貞貰ってあげてもいいんだけどね)

心の中で呟きながらも、瞳の端に映った男子に気を取られる。

その人物は大勢の人が歩いているにもかかわらず真っ直ぐ歩き、人とぶつかっても気にせず氷理に向かってきた。

「またきた」

隣にいた女子が小さな声で呟く。

「み、御柴氷理っ、お、俺と付き合えっ」

細い身体にギョロツとした細い目をした男子。

まるでトカゲを思わせる彼、蜚岳樹生は生物学を専攻し、将来学者になると期待されている人物だ。

細い身体にTシャツとジーンズ、そしてブカブカの白衣を羽織った蜚岳は、氷理がこの大学に入った三年前から告白を続けている。

何度も断り、何度も付き合えないと伝えてもあきらめない彼は、週に二回は必ず告白してくるほどだ。

ある意味、これだけ思われていて嬉しいのだが、どうしても見た目が趣味に合わない。別に見かけで人を判断する気はないが、彼の容姿はどうしてもある生物に重なってしまうのだ。

闇に巢食い、人々に危害を及ぼすあの生き物を。

「今日、今日は断るな……お、俺がおまえの男になってやる。へ、へへ……」
これだけ断れていながらも、よほど自信があるのか。

彼は上から目線で氷理に言い寄り、薄気味悪く口角を吊り上げた。

「ごめんなさい、何度も告白してくれるのは嬉しいんだけど、今は誰かと付き合う気ない

の」

「くっ、ま、またこの俺を……、またくるっ」

いつも通り明るい口調で断った。

望み通りの言葉を聞けなかった蜚岳は顔を歪ませ、怒りを隠そうともせずに来た道を戻っていく。

「氷理も大変だよ、あんなのにつきまとわれて」

「ええ、まあ……そうね。告白されるのは嬉しいけど」

怒りに肩を震わせている白衣男を見ながら、小さく溜め息を吐く。

彼がもう少しかっこよくて自分のタイプなら、軽い気持ちで付き合ったかもしれない。しかし、あの容姿と性格では願い下げだ。

努力しても好きにはなれない。

（まっ、努力して好きになること事態、間違いなんだけどね）

思ったことに軽く笑いながら視線を前に戻す。

これ以上、あんな男に気を取られていては時間の無駄だ。

「でさ、どうよ？」

「？」

いきなり隣にいた男子の言葉に首を捻る。

「ひでえな、聞いてなかったのかよっ」

「ごめんごめん、で何？　これからホテルに連れ込もうとしていたら殴るわよ」

「んなことじゃねえよ、今日の合コン行こうぜってことだ」

「さっき断ったでしよう、いい加減あきらめて」

「しゃーない、あきらめるか……。そのかわり、今度の合コンは約束だぜ」

「はいはい、エッチな恰好でもパンツでも見せてあげるわよ。見せて童貞のあんたたちを
悩殺してやる」

「うっ」

上目遣いで見上げてやった途端、男子たちは氷理の下着姿を想像したらしい。

顔を赤らめ、少し速度を落として女子の後ろを歩きだした。

「可愛いっ」

あそらく、下半身に異常をきたしてしまったのだろう。

彼らの純朴さに、氷理はくすつと笑った。

「で、氷理はこのあとなんの用事があるの？」

「え？　ああ、ちよつと家の用事だね。ほんと、困っちゃうわよ」

「ふーん、大変だね」

「ま、しょうがないんだけどね。じゃあ、また明日」

「うん、じゃあね」

軽く手を振り、氷理は一緒に歩いていた集団と離れた。

※

（えっと……、聞いた情報だと、確かこの時間だったはずなんだけどお……）

友人たちと離れてから数時間。

氷理は人通りの少ない裏路地で物陰に隠れ、何かをじっと待っていた。

隠れているとはいえ、闇夜の中で肌の露出が多い服装はかなり目立つ装いだ、時々通る人は彼女に気づきもしない。

見てくることはあるが、まるで電柱か樹木のように気にも留めず通り過ぎていく。

（気配を消しているといっても疲れるのよね、ただ隠れているだけってのも）

物陰に隠れてから、すでに三十分は過ぎている。

さすがに、これ以上待たされるのは精神的にきつい。

（もう帰っちゃおうかな？ 私にこんな仕事を任せる一族が悪いってことにして……あ

っ!?)

分家である御柴の本家、退魔師の総本家である紫羽^{しはね}が仕事を任せたことが悪い。

ということにして帰ろうとした矢先、氷理の瞳に酔っぱらいのような小太りの中年男が映った。

その中年男はヨロヨロとしているにもかかわらず目が血走り、涎も垂らしていてどこか異様だ。

なによりも、生き物でも隠しているようにズボンの股間がモコモコと蠢いている。

(はあゝゝゝ、見つめちゃった……)

判断が少し遅かった自分に腹が立つ。

あと一分、いや三十秒が早ければ見つけることもなかったのに、「これでは見つけれなかった」という言い訳ができない。

「しかたないか……、よしっ」

気持ち切り替えるように気合を入れて物陰から飛び出した。

(どこに行こうとしてるんだか)

気配を消しながら、物色でもしているように辺りを見回して歩く中年男を追う。

人通りが少ない路地。しかも夜ということもあって、すれ違う人が一人もない。

見るのはネコか犬、木々に止まっている鳥くらいだ。

(確かこの先は川だった気がするけど……)

まさか、川魚でも取ろうとしているのかな？ などと思いつつ、氷理は追跡し続けた。

※

「ひっひっ、い、いい実験材料が採れた。部室でこ、これを培養すれば、新たな研究が……」
河川の草むらの中で何匹もの虫を採取した蜉蝣は、嬉しそうに細めた目で虫籠を眺めながら立ち上がった。

全身を泥にまみれさせながらも気にしない彼は、採った虫を興味深そうに眺め、ニヤニヤと口元を歪めている。

「む、虫はいいなあ虫は、弱くて小さくて、え、餌を使えば思いどおりに動かすことができる。あ、あの氷理も、いつかこんな風に扱って……ひ、ひひひ」

薄気味悪く笑い、氷理が自分のモノになった時を想像する。

あの身体を舐めまわし、チンポをしゃぶらせ、好きなだけマ○コに突っ込んで精液を注ぎ込む。

そう想像するだけで股間が疼き、射精しそうになった。

「ああ、が、我慢できない。また写真を使って……ん？」

部屋に帰り、氷理を隠し撮りした画像を使って性欲を満たそうとした蜉蝣の目に、草むらに向かってくる人影が見えた。

「な、なんだこんな時間につ、お、俺の虫場に……っ!! あれはっ」
 中年男の後を追う氷理の姿に、蜉蝣は目を丸くさせた。

※

河川の草むらに踏み込んでいく中年男の後を追っていた氷理は、肌に触れる草の感触に不快感を覚えていた。

(なにここ? 蘆^{あし}みたいな草が多くて、それになんか空気がじめっとして……)
 異質な空間に迷い込んだような感覚に顔を顰める。

それに、こんなに草葉が多くては相手を見失いかねない。

氷理と中年男との距離は徐々に狭まり、今では数歩後ろを歩いているような状態だ。
 「ココラ辺でイイか、ケケ……」

(え?)

立ち止まった中年男がくると踵を返し、氷理の姿を眺めて薄気味悪く笑った。

(気づかれてたっ!!)

驚きとともに身構え、今さらながら自分がこの場所に誘導されたことに気づく。
 こんな場所なら、少しぐらい叫んだところで誰も気づかない。

顔を染める。

蜉岳の視線は膣壁の至る所に這わされ、まるで見られた部分がさわられていくようにムズと疼きだした。

「やめ、そこから先は見ないで……ああっ!？」

膣口がさらに広げられ、手術用の照明が膣内の障壁を照らしてきた。

「へへへ、そういうことか」

処女膜を確認した蜉岳がゆっくりと動き、淫妖な表情を浮かべながら再び肢体に伸し掛かった。

処女を奪える喜びに彼の目は輝き、唇が残酷な笑みを浮かべている。

「淫乱で有名な氷理が処女だったとはな、へへ、へへへ」

「そ、そんなに嬉しいのかしら……なら、ありがたがつてよね。私にとっては大したことじゃないけど」

「そうかよ、なら今から俺が最初の男になってやるっ」

ぐにつ、じゅりゅ……じゅずじゅぢゅず……。

「くっ、くうううううっ!？」

蜉岳が肢体に涎を垂らしながら、ゆっくりと腰を進めてきた。

触手ならではの肉幹のたわみも利用して膣口を広げたペニスは、そのまま膣を突き進ん



でお腹の中に侵入してくる。

「ぐっ、あぐううううっ……はあはあ……あううっ」

ミチミチと閉じていた膣穴が拡がり、今まで離れることのなかった壁が離れていく感覚に悲しみが込み上げる。

処女を失うことはなんでもない。

たかが膜一枚を失っても何一つ変わらない。

そう思っていたが、ゴム塊のような触手ペニスが身体の中に突き刺さり、焼き鑊ごてのような熱で膣を灼かれると心が壊れそうになる。

頭の中では触手ペニスが膣に突き刺さっているイメージが鮮明に浮かび、胎内がこの男の形に変えられていく感覚を覚え込まされていく。

（や、やだっ。こんなヤツに犯されるなんて、どうして私がこんな虫好きの男に……）

今にも口から出そうな言葉を唇を噛み締めてこらえた直後、膣内を突き進んでいた触手ペニスが突然動きを止めた。

「へ、へへへ……」

切っ先を処女膜に触れさせた蜉蝣がニヤリと口元を歪める。

「あ、ああ……」

言葉が見つかからない。

氷理はただペニスの突き刺さった陰部を見つめ、拘束された分娩台の上で処女が奪われる瞬間を待たされた。

「これでおまえは俺のもんだっ」

「ああっ、やめて……それ以上挿れないで……、それ以上私の中に……」

じゅりゅ……じゅず……プツッ！

「ひうつ!? ひいううううううううううう——っ！」

処女を奪われたくない思いが言葉になった瞬間、亀頭に押された処女膜がわずかに伸び、軽い音とともに無残に突き破られた。

処女を失った肉体は、陰部から身体を左右に引き裂かれたような激痛が走り、この男が最初に膣内を貫いたペニスの持ち主だと心に刻み込まれる。

（痛いっ、痛ああああああああっ！　なんでこんなに痛いのっ!?　なんでこんなに苦しいのよっ！）

金色の頭を分娩台の枕に押しつけ、瞳の端に涙を滲ませて顔を左右に振る。

今にも「痛いっ、やめてっ」という言葉が出てしまいそうだ。

処女膜を引き裂いた触手ペニスは瞬く間に膣壁を拡張、少し硬い子宮口にまで切っ先を押し当ててきた。

「んあっ、あくっ……はあはあ、こ、こんな奥まで……んううつ、お腹がいっぱいにされ

て……はあはあ……くっ、はくうううっ」

肉体の内に侵入した異物に下腹部が膨らまされている。

その痛みと息苦しさに思考が停止してしまいそうだ。

膣は触手ペニスを排出させようとしているが抜けることはなく、それどころかその締めつけで快楽を得た肉幹がうねり、まだ痛む膣壁を刺激してくる。

「くあああ、ああ……はぐううううううっ！ はあはあはあ……」

苦しげに呻き、やっと慣れてきた痛みに瞳を潤ませて照明を見上げた途端、まるでそれを待っていたように蜉蝣のトカゲ顔が割り込んできた。

「どうだ氷理、俺に女にしてもらった気分は？」

「うっ……はあはあ……わ、悪くない……わね。た、ただ、せっかく処女を奪われるなら、もっとエッチの上手な男に処女膜を破って欲しかったわ」

「俺が下手だって言うのかっ、処女のエロ女のくせに、ただのマ○コ生物のくせにっ！」
じゅぶっ、じゅりゅっ、じゅにゅっじゅぶっ！

「くあああ、ああっ、はぐっ、い……ひいくううううううううううっ！」

腰を動かしてきたと同時に、膣内をヤスリで擦られているような痛みが襲った。

狭い膣は触手ペニスに隙間なく埋め尽くされ、亀頭がピストンされる度に膣壁が拡張され、先端が子宮口にドスツドスツと突き当たってくる。

「うあああつ、あつ、つつ……ああつ、くつ、はあはあ……ひいきいいいいいつ」

「俺の女になって幸せだろう、へへへ……チンポがこんなに深く入ってるぞ」

「あうっ、あつ……くあああつ！ やめ……奥、奥を突き上げないで……あふっ、子宮潰れ……潰れちゃう……あつ、あああつ」

ペニスがピストンし、膣内で亀頭が動く度に身体がバラバラにされているようだ。

処女を破られた痛みもあるが、初めての膣に彼の触手ペニスは大きすぎた。

（こんなに痛いなんて、お腹の中がめちゃくちゃにされる、このままじゃアソコから全部掻き出されちゃうっ）

まだ身体が動かせるなら痛みに耐える術もあったかもしれない。

しかし、こう拘束されては歯を喰い縛るのが精いっぱいだ。

せめて痛みを告げる言葉で彼が喜ぶのだけはさせまいと唇を噛み締めるが、どんなに唇を噛み締めても子宮口を突き上げられる度に声がもれてしまう。

「んあああつ、やつ、はくっ、ああつ、壊れ……あつ、はあはあ、ひいぐうううっ」

「気持ちいいのか淫乱、こんなにおっぱいが揺れてるぞっ」

「そんなことない、気持ちよくなんて……くああああつ」

蜂岳が腰を叩きつける衝撃で柔房が大きく揺れ、尖った乳首が震えながら彼の身体に擦れ、焦燥的なくすぐったさが胸を突き抜ける。

肉幹に引つ張られる膣口からは愛液と破瓜の証が流れ、触手ペニスから染み出した先液の所為で濡れた音が大きくなっていく。

じゅぷつ、じゅちやつ、じゅりゅじゅぷつ。

「ンあああつ、あつ、音が……音が聞こえて……あつ、やだこんな音……濡れて……」

「良くなってきたじゃないか、このマ○コは俺のだ、俺専用の穴だっ！」

「ふうあああああつ、あつ、嘘っ……今、今ビリッて……まさかもう……あつ、あああつ、ふあああああつ！」

徐々にお腹の中がキュンキュンと疼き、ムズ痒くなってきた。

触手によって体質が変わった蜉岳の体液、そして先液が膣内に塗された所為だというのは理解できるが、こんなにも簡単に感じるようになるとは思ってなかった。

膣の狭さも、ペニスを胎外に排出させようという動も変わっていない。

それなのに膣壁がうねり、彼を喜ばせるようにペニス全体に膣壁が絡まっていく。

（やだ……感じたくないっ、こんなやつに感じるなんて絶対ヤダっ。感じないで……私の身体お願いだから感じないでよっ）

身体を揺すられ、触手ペニスに膣内を蹂躪される刺激に耐えながら自分に言い聞かす。

「へへへ……、最高だ、このマ○コは最高だ、気持ちいい、気持ちいいぞ氷理、かぷっ」

「はあううっ!? 今ダメ……今乳首……あつ、あああつ、あつ、あつ、はあんんっ」

耐えようとしていた気持ちが、乳首をしゃぶられた瞬間吹き飛んだ。

亀頭が当たる子宮口の痺れと、舌が絡まってくる乳首のムズ痒さが同時に頭の中で響き、快楽を求める心が剥き出しにされていく。

一瞬白く染まった思考の所為で肢体はセックスの刺激に反応してしまい、お尻が勝手に上下に動いてペニスに応えてしまった。

「尻が動いてるぞ氷理、感じてるのか？ 感じてんだろう？」

「か、感じるわけない……はあはあ……私があんたみたいな下手クソに……あつ、ダメ……子宮疼いて……ふああああつ、あつ、ああつ」

「ならこれはなんだ？ マ○コを突く度にビチャビチャ音が鳴って、膣がチンポに吸いついてくるぞ」

「そ、そんなこと、あ、やあああつ、突かないで……はうつ、はあはあ、おかしくなる、我慢できなく……あ、ああ、やううううつ」

快楽を覚え込ませるように触手ペニスが突き込まれ、子宮口を強く突き上げてくる。

否定したくてもできない快楽に思考は途切れ、身体がペニスを求めるようにお尻をくねらせて彼を射精させようとする。

「うあつ、あつ、ふあああつ、ダメこんな、あつ、お腹の中がジンジンして、あうつ、ダメつ、流される……私こんな男に……あつ、ああつ、あつあつあつ、ふあああつ」

初めて受けた痛みに続き、膣内で硬く熱い肉棒が動く感覚。

そして、その肉槍に膣壁と襞を擦られ、子宮口を突き上げられる気持ちよさに精神が追いつかない。

耐えられると思っていた快楽は精神の限界をあつさりと超え、ペニスが奥に当たつてくる度に肉体が痺れていく。

「ふあっ、なにこれ……ああっ、これが犯されるってことなの……はうっ、アソコの中が痺れて、私もう……、もう我慢できなく……」

「うひゃひゃ、さすが淫乱な氷理だ、処女膜破られたばかりなのにもう感じて、はあはあ、マ○コが精液求めて蠢いてるぞ」

「そんなことないはずなのに……やあんんっ、アソコがペニス求めて……あっ、子宮が疼く、子宮が痺れて、あっ、ふあああああっ」

熱い亀頭が子宮口を突き上げ、触手幹が膣内でうねった瞬間意識が飛びそうになった。

「あうううっ、い、今のなに？ はあはあ、今身体中が痺れて、あうっ、今のまさか……」

快楽を感じた身体が絶頂を迎えようと震え、精液を求めた子宮が収縮し始めた。

頭の中は今まで感じたことのない快楽の期待感が渦巻き、相手が気持ちの悪い蜉蝣で、膣内に入っているのが触手ペニスだということさえも忘れそうだ。

「んあっ、あっ、ああっ、や、ヤダっ、イクのだけは嫌っ！ こんな男に処女奪われただ

けでなくイッチやうなんて……ああ、もうやめて、あうっ、もう抜きなさいよっ」

「だ、誰が抜くか、はあはあ、このままマ○コの中に射精してやる。たっぷりと出して、俺の精液を染み込ませてやる、んろおおお」

「そんなのイヤ、膣内に出されるなんて妊娠しちゃうじゃな……んぶおおおおおっ!!」
堪えられない快楽に喘ぎながら拒んだ瞬間、蜚岳の舌が触手のように伸びて唇に侵入してきた。

ザラザラとした軟体の舌はそのまま口腔を颯り、唾液を滴らせながら狭い喉に突き入ってくる。

「んぶうおおおっ、んぶっ、んえ、んっ、んあ、んっ、んぶっ、んくううううううっ」

（し、舌まで触手のように……、こ、この人、もうこんなに侵食されて……）

触手舌と触手ペニスに上下から犯されながら、氷理は蜚岳の身体に起こった変化に慄いおののていた。

触手と融合したにしても、この変化は早すぎる。

つまり、そこまでこの男の欲望は強く、心の中で黒い感情が渦巻いていたということだ。
（もう元には戻せない、彼はこのまま……っ!!）

「んぶおおおっ、んぶっ、んうあっ、んっんっんっ、んぶっ、んびいいいいっ」

突如速くなった腰つきと、重なってきた唇に瞳を見開く。

触手舌で喉を犯されながらのキス、そして射精に向けた突き上げに全身がピクピクと震え、膣が精液を駆け登らせる肉幹の脈動を感じ取った。

「んぶうううっ、ぬっ、やぶえっ、やめれ……んぶっ、んう、んうっ、膣内は……んえ、やめ……できひやぶっ、妊娠しぶあ……んんっ、んうっ、んうっ、んぶっ、んうっ、んぢゅっ、んんんっ」

「イクっ、イクぞ、うへっ、おう、おお、うああっ、おっおっおっ、うおおっ」

「んんんんっ、膣内は……膣内はやふえ……んうううっ!? 太くなっへ、んあっ、んんんっ、ひいうううっ!!」

びゅぷるるっ! びゅぷっ、びゆるびゅぷびゆるびゆるるるるっ!

「んくううううっ! んうっ、んびいいいいいいいいいい
っ! っ!」

膣内の脈動に顔を振った瞬間、蜉蝣の触手ペニスが一気に膨れ、熱くなった亀頭から灼熱の粘液が噴き出してきた。

まるで使い古した油のようにドロドロとした精液は子宮口に噴きかかり、徐々に聖域の内部に侵入して自分の子を孕ませようとしてくる。

「んううっ、んうっ、いうっ、ぶぐうううううううううううううううううっ!」

(入ってくるっ、子宮に……イヤっ、あ、それなのに、イヤなのにいいいいいいいいいい

「ほんとにお礼を言うべきかしらね」

「あ、ああ？ チンポ突っ込んでもらえるお礼か？」

勝手に納得する蜚岳にクスッと笑いつつ、氷理はコルセットを外して上半身の肌を晒した。

「今日は上になってあげるわ、そこで横になって」

「うへ、うへへへへ」

触手に巻きつかれた胸を揺らしながらの誘いに、蜚岳がいやらしく笑いながら仰向けに寝転がった。

「射精したばかりなのに、もうこんなに元気なんて……、私のおま○こで全部出させてあげるわ……、んっ、あっ、ふあああっ」

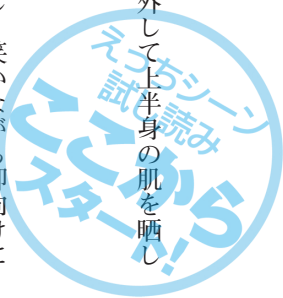
蜚岳の股間に跨り、ショーツの片紐をほどいて触手チンポに陰部を擦りつける。

熱い牡熱を感じた淫唇はヒクヒクと蠢き、淫裂の奥からダラダラと愛液が溢れてペニスに滴った。

「見て……、あなたに女にされたおま○こ。もうこんなに濡れて、ビラビラだつて拡がってるわ」

指で淫唇を拡げ、膣口と亀頭が擦れ合っているのを見せる。

陰部には蜚岳の視線が突き刺さり、興奮した触手がさらに乳房と太腿に喰い込んできた。



「挿れるわね、今から私のおま○こに根元まで……あ、んあああつ、ああつ、ふあつ、あつ、ふあああああつ」

「うへ、拡がってる、ま、マ○コがゴムのように拡がって、うへ、うへへへへつ」
生物に興味がある蜉岳にとつて、新たな生命を作り出す行為は何度見ても興味を削ぐことは無いらしい。

膣口が拡がりながら亀頭に被さっていく様子を瞬きもせずに見つめ、クプツと音が鳴るように切っ先を包み込む光景に歓声をあげた。

「ああつ、入ってきた……あふつ、私のおま○こに蜉岳くんのチンポが……あ、ンあああつ、ふあああああああああつ」

天井を見上げ、脚をM字にしながら一気にお尻を落として触手チンポを迎えた。

完全に彼のモノに慣れた膣はキュツと音が鳴るように肉幹を締めつけ、子宮口がキスをするように切っ先に吸いつく。

「んああ、ああつ、あつ、入ってるつ、私のお腹の中にチンポが、大きくて長い蜉岳くんのおチンポが奥まで入ってるうううつ」

「うおおつ、最高のマ○コだ。チンポに吸いついて、もう絡まってきやがった」
「あ、はううつ、感じて、私のおま○こで感じて、気持ちよくなつてつ」

彼が喜ぶ言葉を口にしながら全身を震わせ、タイトミニを限界まで捲り上げて切っ先が

到達した部分を見せる。

「はあううっ、こ、ここよ、ここの奥にあなたのチンポが入ってるの、あんっ、こ、こんなところにまで刺さってるのよっ」

蜉岳の手を取り、お臍の下をさわらせて肌の奥にある亀頭を教える。

自分のペニスの位置を教えられた彼は薄ら笑いながらお腹を撫で、そこに自分の子を孕ませようと腰を突き上げてきた。

「きゃんんっ、あうっ、う、動いて……好きなように動いて、あふっ、ああ、ダメ……私も腰動いちゃう、気持ちよくておま○こ勝手に締めつけちゃうっ」

「うひゃ、へへへ……、孕ませてやる、今日は絶対に孕ませてやるぞっ」

「んあっ、あうっ、あ、んううううっ、はあはあ、は、孕ませて……このチンポで私を孕ませてっ。いっぱい注いで、お腹いっぱいになるまでザーメン撒き散らしてっ」

肢体を上下させ、蜉岳の突き上げに併せて触手チンポを膣全体で扱き上げた。

膣壁は波打つように蠢きながら肉幹に襞を絡ませ、子宮口が亀頭に押し上げられる度に溢れた愛液が触手チンポに塗されていく。

「んああっ、ああっ、あっ、い、いいっ、チンポが奥に当たる度に子宮が痺れて、ふあんっ、こ、腰止まんない、おま○こがチンポしゃぶって離せなくなっちゃうっ」

「うへ、うへへへっ、最高だ氷理、おまえは最高の肉穴だっ」

「きやううつ、わ、私は肉穴、んあつ、蜉岳くんの肉便器つ、あ、はあはあ、触手チンポでおま〇こ突かれて喜ぶ淫乱なの、ん、はあはあ、孕むほど精液で汚されて喜ぶ淫乱便器になっちゃったのっ」

自分を貶める言葉を叫びながら触手チンポを締めつけ、胸を揺らして触手に嬲られる乳首を見せた。

肉幹で歪んだ膣口には脚に巻きついていた触手の切っ先が群がり、少しでも膣内に精を飛ばそうと薄赤い粘膜に擦りついてくる。

「きやううつ、触手がおま〇こに、ひゃんんつ、はあはあ、もつと擦ってきて……おっぱいとお腹にももつといっぱい、もつとチンポ擦りついてきてっ」

ニユル、ニユルニユル、シュルシュルシュルッ！

氷理の言葉に反応するように触手が動き、身体に触れることもなくうねっていた切っ先が押し寄せてきた。

「あ、んあああつ、そうよ、もつとおっぱいに擦りつけて、ああつ、んつ、お腹もいっぱい撫でてっ！ ああつ、あつ、んふあつ、はあはあ、んあああつ」

氷理の求めるまま肉幹に巻きつかれている柔房にさらなる触手が群がり、幾つもの切っ先が乳首を転がしてきた。

「きやんつ、すごい、おっぱい感じちゃう、ふあんつ、乳首ビリビリして……」

「この淫乱女が、ここにもぶち込んでやるよ」

「ん、ああう、はあはあ、ここって……ひやううううっ！ お腹に、ああっ、そこは入らない……お臍は……あ、ああ、ふあんんんんっ」

挿入できないと分かりながらもお腹が何本の触手に嬲られ、その切っ先が縦長のお臍に入り込もうとしてきた。

初めての行為にお臍には強烈なくすぐったさが走り、もつとそこを苛めて欲しいとばかりに肢体の動きを加速させた。

「んああああっ、すごひ、すごいの……ああっ、全身にチンポが擦れて、あっ、はあはあ、まるで何人もの人に犯されているみたいで……きやうっ」

「もつと腰を動かせ、もつと俺のチンポを気持ちよくさせろっ！ おまえの力をもつと吸ってやる、もつと吸って俺の力に変えてやるっ」

「ふああああああっ、ああっ、奥に強く……ああっ、すごい、これイッチやう、私イッチやうわっ、んあっ、あっあっあっ、ひやうううううっ！」

身体が震え、膣がキュツと締まって愛液を吹き出した。

「ンあああつ、あつ、ああっ、はあはあ、わ、私今イッチやった……今キュンって子宮が震えて……あ、ンあああつ」

「こ、このエロ女っ。今日はいっぱいイかせてやるから力を吸わせろ。最近少なくなつて

るおまえの力を限界まで吸わせろっ」

「ンくうあああああああああつ！ 今の激しい、あうっ、激しいっ、奥コンッて突き上げられて、子宮が、子宮が拡がっちゃいそうだった、あ、子宮でチンポしゃぶっちゃいそうだったわっ」

膣内でうねった触手チンポに壁と襷が擦られ、ドンッ突き当たった切っ先に子宮口が拡げられた瞬間、一瞬意識が飛びそうになった。

挿入されそうだった子宮からは愛液とともに濃厚な靈氣が溢れ、先液を吹きかけてくる切っ先に吸い取られていく。

「ンああああああ……、また吸い取られちゃった……あふ、私の靈氣……またこのチンポに吸い取られて……」

「うひゃ、うひゃひゃひゃひゃっ、そうだ、もつと垂らせ、もつと靈氣を俺に寄越せっ、この力を吸えば無能どもを下僕にできるっ、おまえを永遠に独占できるっ」

「あ、そんな……ああっ、あつ、ふあああああああつ」

子宮を突き上げられた衝撃で背中が仰け反り、また軽い絶頂を迎えてしまった。

肉幹に歪められ、幾多の触手が群がる膣口からは愛液がプシュプシュと吹き出し、蜉岳の顔にまでかかって部屋を氷理の香りで満たしていく。

「ふあああつ、あつ、ああ、くうん……っ、はあはあ、ま、またイッちゃった……あう

っ、腰止まらないのに子宮何度も震えて、ひゃん、もっと気持ちよくなる、もっと気持ちよくなっちゃうわっ」

触手が肉幹をビクビクと震わせながら氷理の全身を這いまわり、いつ射精してもいいように切っ先を肢体に向けた。

「ああ、んああああっ、お腹の中のチンポも大きくなつて、ひゃんっ、ああ、しゃ、射精したいの？」

「くっ、はあはあ、で、出ない、射精したいのに出ないんだ。おうっ、力も吸えなくなつて……くっ、ど、どうなってるんだ、うああっ」

犯している蜉岳、そして犯されている氷理。

それなのに蜉岳のほうが額に汗を滲ませ、薄く笑う氷理に射精しようと必死に腰を突き上げた。

膣内の触手チンポは限界まで膨み、精管の濁液を溜めて龟头を膨らませているのに精液が射精でこない。

何度も子宮口を叩いては先液を飛ばし、肉幹を激しく震わせているだけだ。

「あんっ、はあはあ、またチンポが膨らんで、んん、もう爆発しちゃいそうなのね……」

「くううっ、イクぞ淫乱っ、せ、精液便所マ○コ孕ませてやるっ」

「きやううっ、あっ、あっあっ、好きにしてっ、あんっ、私の身体に出してあなたの熱い

のでいっぱいにしてつ、あつ、ああつ、あつあつあつ、くうあああああああつ」

激しく突き上げられ、膣から発生した痺れが一瞬で頭の中まで貫いた。

腰はガクガクと震え、緩んだ子宮口が亀頭を包むように被さっていく。

「ああ、い、イッて、おま○こにいつぱい出してっ、孕ませるほど注ぎ込んで、子宮いっぱいにしてええええええええええええつ！」

びゅふるるるるるっ！　びゅるっ、びゅるびゅふっ、びゅふびゅるびゅりゅっ！
びゅふびゅりゅびゅるびゅふっ！

「ああああああああああああああああああ——つ！ つ！」

亀頭が最大まで膨らみ、膣内で炸裂弾が破裂したような衝撃とともに、溜まりに溜まつた精液が子宮の中に噴き出した。

「んあつ、あふつ、ああつ、こんなに、ひやうつ、精液がこんなに……ああつ、熱い、熱
いいいいいい——っ！」

煮え湯のような粘液が柔房やお腹、陰部にまでかかり、肢体が一枚の粘液膜に覆われたように包み込まれていく。

一番濃厚な精液を噴き出す膣内の触手チンポは、子宮口にはまり込んだ亀頭から放尿のように精液を飛び散らせ、子宮の奥壁を直撃しながら内部を満たしてくる。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>